

条件の階層化と逆接表現

家田章子

名古屋女子大学非常勤講師

iedasjp@yahoo.co.jp

1. はじめに

逆接表現のうち、「テモ」は「ノニ」と頻繁にその使い分けの分析がされる表現である。これまでもいろいろな視点から記述されてきており、各表現の使用制限の違いや発話意図の違いについて述べられてきた。しかし、その違いは統一的に説明されていない。本発表では、条件の階層化の概念を用いて統一的な説明を試みる。

2. 先行研究の記述

2.1 「テモ」と「ノニ」の使い分け

「テモ」と「ノニ」の使い分けの観点から述べられてきた「テモ」の主な特徴は以下の通り。

「テモ」は「もし～」「たとえ～」のような仮定条件に用いることができる。

(1)もし病気に{なっても / *なるのに} 彼女は会社を休まない。

「テモ」は並列の表現が可能

(2)電話を{しても / *したのに} メールを{出しても / *出したのに} 返事がなかった。

「テモ」は疑問詞との共起が可能

(3)何度{読んでも / *読むのに} 覚えられない。

「テモ」は主節に意思表示を用いることが可能

(4)雨が{降っても / *降るのに} 行こう。

ある特定の時を表す表現と共に使われない。すなわち、「少し前にこれこれのことをしたが、もうすでに(あるいは、まだ)…」というような表現をする場合には用いられない。

(5)昨日{ *買っても / 買ったのに} (もう) かわれている。

テモ節と主節を対比・照応させるといった関係はなく、テモ節は、状況的・例示的な意味あいしかもっていない。

(6) 雪は夜に{なっても/なったのに} やみませんでした。

2.2 テモの用法と条件

前田(1993)はテモの用法を大きく二つに分けている。

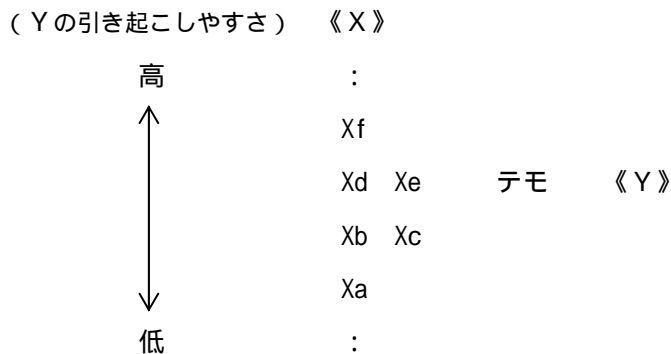
「条件の並列(=並列条件)」と「条件関係の否定(=逆条件)」の2つに分けられ、この両者は、連続的に存在する。並列条件として帰結に対して等価的に並べられた条件が、ある種の序列化を受け、通常ならば主節事態と結びつかないような事態が条件として選択された場合に、逆条件という解釈が生まれてくる。

3. 条件の階層化

坂原(1985)によると、「条件の階層化」とはある条件があることに対して十分条件であるかどうかを考えるだけでなく、その条件が予期される結果を引き起こしやすいかどうか、すなわち有利な条件か、不利な条件かも考え、ある結果を導く十分条件が複数ある場合は、それらの条件が強さに応じて階層化されることを言う。

また、逆条件の「テモ」は、「XテモY」という文において、最もYを引き起こす期待値が小さい要素Xを取り立てているという指摘がある。(前田 1993、陳 1999)

「XテモY」



4. テモと頻繁に共起する副詞

テモ節で頻繁に共起する副詞を調べてみると¹⁾テモ節との結びつきの強い順に以下のような結果が得られた。

いくら、たとえ、どんなに、仮に、多少、なんと、少々、せつかく、ある程度

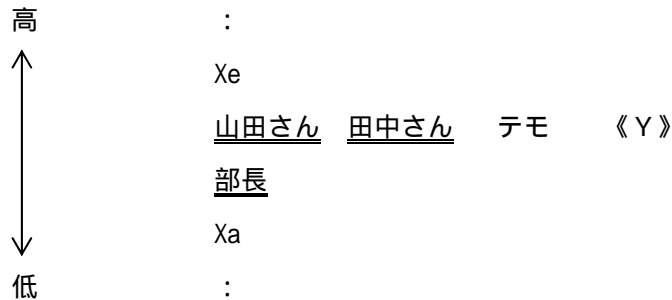
このうち、「多少」「少々」「ある程度」という副詞は、その度合いが極端ではなく、その偏りの程度があまり大きくないことを示している。このことから、要素Xは必ずしも期待値が小さい

とは限らず、「高からず低からず」という要素が選ばれることもあることが分かる。

5. テモの用法と条件の階層化

「XテモY」の文はこれまでも指摘されてきたように、言語化された条件Xの他にも、Yを引き起こす条件があることを暗示している。これが、テモ文の基本的な用法であるとする。

(Yの引き起こしやすさ) 《X》



並列の用法は、テモ節に現れる条件をYの引き起こしやすさというスケールで測ったときに、そのレベルに差がない場合である²⁾。

(7) 山田さんに聞いても、田中さんに聞いても、分からない。

逆接の用法は、Yを引き起こしにくいと話し手がとらえている条件Xが言語化される。この条件をYの引き起こしやすさというスケールで測ったときには、言語化されなかった他の条件と比較して、その条件より相対的に低いレベルのものである必要がある。ただし、最も低いレベルの(期待値の小さい)ものがテモ節で言語化されるとは限らない。

(8) 部長に聞いても、分からない。

(山田さんに聞いても、分からない。それより分かりそうな部長に聞いても...)

2.1で挙げたような、「ある特定の時を表す表現と共に使われない。」という制約も、「テモ」は、言語化されたX以外にYを引き起こす条件を暗示しなければならないという点から考えると説明が可能である。過去に起きた事実は唯一の既成の事実であり、「他の可能性」を排除してしまうため、「テモ」節に用いることは不可能になる。

6. 「テモ」と「ノニ」

前節で見たように、テモの逆接の用法では、「XテモY」の文において、話し手が暗示している条件よりも相対的にYを引き起こす可能性の低い(期待値の小さい)条件Xがテモ節に現れる。Yを引き起こす可能性の低い条件であるにもかかわらず、Yが引き起こされるという構造

を持つ点では、ノニの逆接の用法と共通する。

この二つの表現の違いは、まず、「テモ」が常に複数の条件を示しているのに対し、「ノニ」は単一の条件しか示さない点である。たとえ言語化されていなくても、「テモ」がある以上、その条件は単独ではなく、常に他の条件が意識されている。もう一つの違いは、言語化されるテモ節は必ずしも主節の事態を引き起こす条件として特別に低い必要はない。しかし、ノニ節は特別に低い条件でなければならない。

- (9) 暑くても、エアコンをつけない。
- (10) 多少暑くても、エアコンをつけない。
- (11) 暑いのに、エアコンをつけない。
- (12) ? 多少暑いのに、エアコンをつけない。

(12)のようにノニ節で「多少」という程度の高低があいまいな表現を用いると、文の容認度が落ちる。

注

- 1) 「毎日新聞全文記事データベース CD-毎日新聞」(91年版・99年版)のデータを対象とした。9年間どの年でも2.0以上のtスコアをマークした副詞を抽出。
- 2) 「誰に聞いても、分からない。」のようなテモ文は、主節を引き起こしやすさという点において、どの条件も差がないと考えられるため、並列の用法であると判断する。

主な参考文献

- 市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク。
- 才田いずみ(1980)「「のに」と「ても」」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』3, pp.37-47.
- 坂原 茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会。
- 白川博之 監修(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 鈴木 忍(1978)『教師用ハンドブック 文法 助詞の諸問題1』国際交流基金。
- 田中 寛(1989)「逆接の条件文<ても>をめぐって」『日本語教育』67, pp.139-158.
- 陳 芬慧(1999)「接続助詞「～ながら」について -「～ても」と比較して」『世界の日本語教育』9, 163-175.
- 前田直子(1993)「逆接条件文「～ても」をめぐって」『日本語の条件表現』pp.149-167, くろしお出版。
- 松岡弘 監修(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店。